

# 『源氏物語』 幻巻における「大空を」の歌について

——「まぼろし」を中心に——

橋 本 昌 代

## 1

光源氏の物語としては最後の巻となっている幻巻は、『花鳥余情』に「此巻には正月より十二月まで月をかゝさす次第にのせたり余巻にはいまたあらざる筆法也<sup>①</sup>」と記されている。亡き紫上を思い、悲しむ光源氏の姿が、月ごとにとりというだけではなく、さらに和歌を配列することによって描きだされているという「特異な巻<sup>②</sup>」である。一年間という時間的な枠組みが与えられ、それが贈答あるいは唱和の十四首、独詠とみなすことのできる十二首、合計二十六首の和歌を中心として「時間の流れ」に従って展開するこの巻のあり方は「歌日記」などと評されている<sup>③</sup>。こうした幻巻の方法については、つとに小町谷照彦氏のすぐれたご論考があり、そこでは、光源氏が「切れ切れに引き裂かれた感情<sup>④</sup>」によって「本質的な孤独<sup>⑤</sup>」と対決

しなければならぬ状況、すなわちそれは散文では荷い切れない物語の状況であり、その状況の中で和歌が選ばとられたのであるとされる。そして、それは「抒情を逆手にとつて物語を作り出していく方法<sup>⑥</sup>」であるという意義づけがなされている。

幻巻には、すでに述べたように紫上の死の翌年の立春から歳暮に至るまでのようすが「時間の流れ」にそうかたちで記されている。四季折々の事に触れて、物に触れての光源氏の哀感が述べられているのである。さらにいえば、そうした四季折々の景物や行事、あるいは「記号的な登場人物<sup>⑦</sup>」が、光源氏の内面とは無関係に流れる「時間」に配されることよつて展開されているのがこの巻であるともいえよう。次の論考にもみられるように「時間」が主題とされる所以である。

【源氏物語】幻巻における「大空を」の歌について

「時間」を生み出すのは光源氏であり、「時間」を能動的に作り出す超人間的なはたらきが、そこにはあった。その光源氏が、今静かに「時間」の流れの中に身をゆだねて、一生を回想している。……中略……主人公が姿を消す幕切れにふさわしい収束のひとときである。

そうした流れる「時間」の中で、個々の歌は「内的な連続なく切断された」<sup>⑨</sup>「スクラップ」<sup>⑩</sup>とまで評されるようなあり方を示している。逆にいえば、それぞれの歌の中に四季折々の景物や行事が詠み込まれ、特定の「時間」を持つことによって、かろうじて幻巻の全体としての秩序が保たれているのである。

しかし、このように巻全体が「時間」の流れによって貫かれているにもかかわらず、幻巻の歌の中には景物や行事、あるいはできごとといった時や場を明確に示すものが詠み込まれていない歌がある。<sup>⑪</sup>それは他ならぬこの歌である。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂のゆくへ尋ねよ

(四・213<sup>⑫</sup>)

『河海抄』などによれば、「幻」という巻名もこの歌に依るとき

れている。<sup>⑬</sup>それ故に、幻巻においてこの歌は重要な意味をもっていると考えられよう。巻全体としては執拗に「時間」の流れを描くにもかかわらず、巻名は「時間」を示さない歌のことばに依って命名されているのである。それ故に、そこには何か特別な意味があるとは考えられないだろうか。幻巻の歌の中では「特異」ともいえるあり方を示しているこの「大空を」の歌は、幻巻の中でどのような意味をもっているのだろうか、以下において探ってみたいと思う。

## 2

神無月には、おほかたも時雨がちなるころ、いとよながめ給ひて、夕暮の空の気色も、えもいはぬ心細さに、「降りしかど」と、ひとりごちおはす。雲井をわたる雁の翼も、うらやましくまもられ給ふ。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂のゆくへ尋ねよ

なに事につけても、まぎれずのみ、月日に添へておほさる。

(四・213)

この「大空を」の歌は、幻巻では「冬」の場面の最初におかれて

いる。「神無月には」と地の文において季節が明示されているにもかかわらず、それを受ける歌の中にはそれに対応するような景物、あるいは行事は詠み込まれていない。古今和歌集以後の伝統的な和歌表現においては「神無月」そして「時雨」とくれば、当然景物の組み合わせとしては「紅葉」などが考えられよう。しかし、この場合は地の文では「雁」がとりあわせ、しかも歌の中では「神無月」「時雨」「雁」がすべて捨象されて、季節とはかわりをもたない「まぼろし」が詠まれているのである。それ故に、その「まぼろし」ということばは巻名にもなるほどの特別な意味をもっていると考えられるのである。

「まぼろし」は『河海抄』に「まぼろしは幻術事也仍術者をまほろしといふ也」(529頁)とある。用例から見るとは歌語としてあまり使用されない語である。

奥津島雲居のきしを行きかへりふみかよはさむ幻もがな

(拾遺77)<sup>④</sup>

思ふべき思ひをひとり思にも行きて語らんまぼろしもがな

(浜松中納言物語)<sup>⑤</sup>

『源氏物語』幻巻における「大空を」の歌について

『拾遺和歌集』の歌には「対馬守小野のあきみちがめ隠岐がくだり侍りける時にとも雅の朝臣のめ肥前がよみて遣はしける」という詞書が付されている。『浜松中納言物語』の歌のほうは、唐にいる中納言が不在の後に代わって後の母の追善供養をした折に、后に対して呼びかけたものである。相方ともに「まぼろし」という語は「もがな」という強い願望表現とともに用いられている。相隔たつた者同士をつなぐことのできるものとしての「まぼろし」の役割への期待は、「まぼろし」という存在が望んでも身近なものとしては存在しえないものである故に、隔てられた者同士が現実的に出会うことは不可能であるというむなししい認識と表裏一体になって、さらに出会いへの願望が強まるのであろう。

光源氏の歌は、「此歌の心は蜀の方士が楊貴妃に尋ね逢ひたりし事なり」として『河海抄』も指摘しているように、方士が仙界に楊貴妃の魂のありかを尋ねて出会ったことをふまえて詠まれた歌である。しかも、『岷江入楚』にいうように、「夢にだに見えぬ魂」という語句は、表現の上でも「長恨歌」の「魂珀曾来夢不入」という詩句との類似性が認められる。しかし、『長恨歌』の場合は「魂珀曾来夢不入」であるが故に方士が登場し、楊貴妃の魂のありかを求めるくだりが展開され、その方士によって「虚無缥缈間」の「仙山」において、楊貴妃の魂との出会いが果たされることになる

のである。

それに対して、『源氏物語』の幻巻の場合は、ほぼ一年間にわたる紫上に対する光源氏の哀傷が終わろうとするところに「夢にだに見えぬ魂」が詠まれている。そこで「まぼろし」の存在が希求されるが、その「まぼろし」は『源氏物語』の物語世界の中では存在するものとしては描かれていない。その「まぼろし」に向かって「魂のゆくへ」が求められているのである。すなわち、この光源氏の歌は亡き紫上の「魂」との出会いなどとうてい不可能であることを十分認識しつつ、それでもなお亡き人に対する思いから詠まずにはいられなかった歌であるということができよう。いわば、この歌は光源氏の紫上に対する哀傷の極点として存在する。先立った最愛の女の魂との出会いを、残された男が切望しながら哀傷するという点では、『源氏物語』は『長恨歌』とパラレルな内容をもちながら、しかも表現の上でも類似性が認められながら「魂」との出会いを描かない。なき人への呼びかけだけが返答を待ち続ける体で存在する。なき人に向かって呼びかけるといふ形式をとるものとしては、たとえば同じく幻巻の哀傷歌の中には次のようなものがある。

待たれつる時鳥の、ほのかに鳴きたるも、「いかに知りてか」と、  
聞く人、たゞならず。

なき人をしのぶる宵の村雨に濡れてや来つる山ほととぎす

とて、いとゞ、空を眺め給ふ。大将、

時鳥きみにつてなむ故郷の花たち花はいまぞ盛りと

女房など、多くいひ集めたれど、とゞめつ。

(四・川)

五月雨の折に「ほととぎす」が「なき人」への思いを托す使者として「きみにつてなむ」と呼びかけられているのである。この場合、「ほととぎす」は周知のように冥途へ通うという伝承をもつ鳥であり、即景的景物であることによって詠歌の対象となり得ているのである。これは、

死出の山越えてきつらむ時鳥恋しきひとのうへ語らなむ

(拾遺 1307)

など、「哀傷」の部立の和歌の中にも、そうした伝承をふまえて「ほ

とどぎす」をなき人との媒介として詠んだ歌を見つけることができ  
る。

『源氏物語』のこの「ほととぎす」の歌の場合は、紫上の死を哀  
悼する場を光源氏と共有する複数の人間が存在する。その共通項と  
しての所与の条件が「五月雨」であり、そして咲きにおう花たちば  
なとそれらを背景として折から鳴く「ほととぎす」であるといえる。  
それらを前提として、個人的な感情として哀傷の歌が詠まれるのでは  
なく、いわば折からの場に居合わせた者の共通の感情によって「哀  
傷」の場が形成されている。それ故に「大将」と詠歌主体が明示さ  
れたり、末尾にはこうした場においては常套的ではあるが「女房な  
ど、多くいひ集めたれど、とどめつ」と記されたりするのである。  
それはもはや記しとどめることに意味がないからであり、この場の  
哀しみは光源氏と夕霧との二首によって代表されているからである。  
また、そうであればこそ、勅撰和歌集などにも同様の発想の歌が見  
出させるのではなからうか。

それに対して「大空を」の歌はいかがであらうか。この歌は地の  
文に示されているように、光源氏が「ひとりごちおはず」場で詠ま  
れたものとして設定されている。つまり、贈答や唱和の相手として  
の第三者の存在を考慮して歌を詠む必要があるということである。

まず、「降りしかど」という光源氏のことばは、

『源氏物語』幻巻における「大空を」の歌について

神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひづるおりはなかりき

を引歌にしているという<sup>17)</sup>。そうであれば、このことばを光源氏がつ  
ぶやくことによつて、「神無月」の「時雨」という、地の文で示さ  
れているこの場を規定する条件は一応満たされることにはなる。そ  
れにしても、「大空を」の歌自体は地の文の制約をほとんど受けて  
いないのである。

「まぼろし」という語は前述したように「方士」のことであると  
されている。「空を飛翔する」という共通項をもつことによつての  
み、折から空をとんで行く「雁」からひきだされたものであると考  
えることができる。そして、歌そのものはすでに見たように『長恨  
歌』を下敷きにして詠まれている。しかしながら、この歌の前の地  
の文には『長恨歌』にかかわる記述は少しもなく、地の文と歌が全  
く整合性をもっていないのである。逆に考えるならば、あえてそう  
してでもこの歌が要求されているということであらう。

しかも、たとえば、

春くれば雁帰るなり白雪の道ゆきぶりにことやつてまし

(古今30)

憂き事を思ひ連ねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な〜

(古今313)

などのように、「雁」という鳥は和歌の伝統においては初春、あるいは初秋の景物とされている。それにもかかわらず、その「雁」が幻巻にあつては初冬に対象化され、さらに和歌を詠む段階ではその眼前の「雁」をもそのまま歌うのではなく、はなれて「まほろし」という、その場には存在しないものへの呼びかけの歌となっている。そのような形で自己の悲哀を表出するという詠歌法は勅撰和歌集の「哀傷」の部立の中にはほとんど見出だせない。

幻巻は全体としては『長恨歌』を引用することによって哀傷が展開されようとしているのではないのは明らかである。では、地の文とのかかわりからみても『長恨歌』をふまえる必然性はないのに、どうして「大空を」の歌が詠まれなければならないのだろうか。

光源氏の「大空を」の歌は独詠であり、しかも『長恨歌』を媒介とすることによって、仙界におけるなき魂というイメージが具体化され、なき魂への呼びかけが可能になっている。『長恨歌』によって、あたかも地上の人間となき魂との贈答が仮構されるかのように見えながら、その実、返歌は期待すべくもないものとして描かれている。出会いの場が想起され、なき魂との出会いが切実に期待され

ればされるほど、かえって出会いのない現実の状況が対比的に明らかになるのである。「なに事につけても、まぎれずのみ」という喪失感だけが、絶望的な現実認識とともに残る。

楊貴妃の魂との出会いが果たされた『長恨歌』を媒介とすることによって、なき魂との出会いの場を想起させ、かえってそのことによって、逆に魂との出会いのない光源氏が対比的に捉えられ、光源氏の哀傷の深さを示すことになり、また物語世界の中においては光源氏自身の哀傷がより深められるという構造になっている。「哀傷」における『長恨歌』の逆説的な利用である。

また、「まほろし」という語は、『源氏物語』の中でも幻巻と桐壺巻の二例以外には用例の見出だせない特殊なものであるだけに、「大空を」という光源氏の歌は、桐壺巻の桐壺帝の歌との対応によるものであると考えられよう。

かの贈り物御覽ぜさす。「なき人のすみか、たづね出でたりけむ、しるしの釵ならましかば」と、おもほすも、いとかひなし。

たづね行(く)まほろしもがな伝にても魂のありかをそことし  
るべく  
(一・40)

このことについては、たとえば萩原広道の『源氏物語評釈』には、

さてこのまぼろしははるかに末なる幻の巻に大空へかよふまぼろし云々といふ歌のところへかけてふかき意の照応ありとおほしきよしあり……

と述べられている。広道のいう「照応」とは、単なることばの上だけの問題にとどまるまい。

桐壺帝の歌もまた、さきほどの「大空を」の歌と同様に、楊貴妃の魂と方士の出会いをふまえて詠み出されたものである。そして、その『長恨歌』によって魂との出会いが切望され、魂への呼びかけがなされながら、それは「なき人のすみか、たづね出でたりけむ、しるしの釵ならましかば」という心内語が示すように、「ましかば」という反実仮想のうちに捉えられるものであり、「かひなし」という認識に収束していくものであった。『長恨歌』との違いは明らかである。故に、この歌の次に「絵に書きたる楊貴妃のかたち」は「いと、にほひなし」そして「唐めいたる粧ひは、うるはしうこそありけめ」と対象化して楊貴妃が捉えられ、それに対して桐壺更衣のほうは「なつかしう、らうたげなりし」ようすは「よそふべき方ぞなき」ものと描かれるなど、ことさらに楊貴妃と桐壺更衣との差異をきわだたせる表現がなされているのであろう。ここでも『長恨歌』は対比的に捉えられ、帝の哀傷をかえって深めるために、そし

『源氏物語』幻巻における「大空を」の歌について

て哀傷の深さを表現するために用いられている。

久保田孝夫氏は『源氏物語』において「長恨歌の神仙譚の世界」は「かひなき」世界としてとらえられていると述べている。物語世界の中では、むしろ『長恨歌』が残された者たちの「かひなき」認識を強めている。

桐壺帝の嘆きは、長恨歌を介して、長い歳月を隔てつつも、光源氏の嘆きとあざやかな相似対応の形姿を示しているといわねばならない。……中略……ここには桐壺巻と幻巻との承接をはかりつつ光源氏の生涯を語りおえようとする閉じめの意図があったと思うのである。

最愛の女性に先立たれ、あとに残された男がともに「かひなき」思いを抱くことによって物語は一つの閉じめに到達する。それはまた、哀傷がなき魂への呼びかけとかたちで高まりを見せながら、同時に「かひのなき」故に閉じられることでもあった。哀傷が「かひなし」という喪失感の故に閉じられ、それがまた、物語の展開の上で一つの終わりを告げるのである。

桐壺巻では「たづね行く」の歌の後、

雲のうへも涙にくるゝあきの月いかですむらん浅茅生の宿

(一・41)

という帝の歌に示されているように、物語は亡き更衣に対する哀傷から、忘れがたみの光君に目が向けられようとしていた。また、幻巻の場合は、最愛の紫上をなくした悲しみや寂しさを嘆く、いわゆる哀傷歌ばかりが詠まれていたが、「大空を」の歌の後は、

宮人は豊の明にいそぐ今日日影も知らで暮らしつるかな

(四・213)

という歌にみられるように、紫上哀傷というよりも、むしろ今日まで生きながらえた光源氏自身の感慨となっており、光源氏が終焉の時を迎えようとしていることを示している。

「大空は」の歌は幻巻において、物語を終えるためにどうしても詠まれなければならなかった歌であるといえよう。

3

御法巻では、八月十四日に亡くなった紫上への哀傷が歌によって

次々となされている。

枯れ果つる野べを憂しとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ  
のぼりにし雲井ながらもかへりみよ我秋はてぬ常ならぬ世に

(四・190)

そして、その哀傷が右の秋好中宮と光源氏の贈答によってしめくくられている。秋の末までなされた哀傷の後は、「女がた」にいる光源氏の感慨が、

「今日や」とのみ、わが身も、心づかひせられ給ふをり、多かる  
を、はかなくて積りにけるも、夢の心地のみす。

(四・191)

と述べられている。そして、その年の冬が描かれることなく御法巻は閉じられ、翌年の立春から幻巻は始められているのである。

幻巻は、内容的に見れば、最愛の紫上を失って悲嘆にくれる光源氏が、平静な心で道心に向かうべくあたえられた巻であり、「何ら物語の進展すべくもない、ただ時間の支配に任せた一年を叙すべく設けられ<sup>®</sup>」ている。そのための方法として選ばれたのが「歌」と

流れる「時間」であるといえる。そして、「そのような時間、いくら堆積しても、時間」としては生きていない<sup>28)</sup>のである。それ故に、幻巻は「はかなくて積りにける」月日を、まさに「夢の心地」で描いている巻であるともいえよう。

物思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる

(四・216)

幻巻末の光源氏の、いわば辞世ともいべき歌であるが、この歌の「今日や」ということばと、御法巻末の述懐の中の「今日や」ということばとの対応は、おそらく偶然ではあるまい<sup>29)</sup>。御法巻末の「今日や」ということばは、

佗つゝもきのふ計はすぐしてきけふや我身の限なるらむ

(拾遺61)

を引歌としており、幻巻の場合は、

物思ふと過る月日も知らぬまに今年はけふに果ぬとかきく

(後撰507)

『源氏物語』幻巻における「大空を」の歌について

を引歌にしていとされている<sup>30)</sup>。幻巻の場合は、もとの歌の上の句はそのまま引用しながらも下の句を詠みかえることによって、歳暮における時間の推移の速さに伴う思いを述べただけではなく、さらに人生の終焉におけるしみじみとした感慨までも詠み込んだ歌になっている。異なった歌をひきながら、御法、幻両巻ともに主題的には「身のかぎり」を詠んでいるのである。語彙が共通している点、やはり注目すべきであろう。

「物語の進展」からいうならば、この光源氏の終焉の場こそが、御法巻の紫上哀傷の後に承接さるべきなのであろう。逆にいえば、万物の枯死する「冬」という季節が、光源氏の生涯の閉じめにふさわしい「時間」として選択されたということである。その「冬」の季節が「大空を」の歌によって始まっている。「大空を」の歌は光源氏に紫上への思いを絶ちきらせ、幻巻の中で一つのけじめをつけながら、全体的に見れば、光源氏の物語の始まりの部分と対応し、光源氏の物語をしめくくっている。幻巻の「大空を」の歌は、歌がまず存在したともいえる歌である。

〈注〉

- ① 伊井春樹氏編『源氏物語古注集成 松永本花鳥余情』による。288頁。
- ② 小野谷照彦氏「『幻』の方法についての試論」『日本文学』昭40・6。
- ③ ②の論文、あるいは野村精一氏『源氏物語文体論序説』など。
- ④⑤⑥ ②に同じ。

『源氏物語』幻巻における「大空を」の歌について

- ⑦ 鈴木日出男氏「光源氏の最晩年」『学芸国語国文学』昭48・6。
- ⑧ 稲賀敬二氏「幻『雲隠六帖』」『源氏物語講座』第四巻。
- ⑨⑩ ②に同じ。

⑪ すべてのできごとが時間の流れの中に位置づけられているが、紫上の一周忌と光源氏が文反古を焼かせる場面は、それぞれの内容を主題とした歌が詠まれているおり、そのこと自体に季節的要因があるわけではないから、歌の中に「季」を示すことばは詠み込まれていない。(次表参照)

△幻巻の歌の分類▽

番号	歌の種類	季節	行(できごと)	事	季節を示すことば(内容)
1	贈答	春			花
2					
3	独詠	春			雪
4	独詠	春			花(紅梅) 鶯
5	独詠	春			春の垣根
6	贈答	春			帰雁 帰雁 花
7					
8	贈答	夏		更衣	
9					
10	贈答	夏		祭	葵
11					
12					時鳥

13	唱和	夏			時鳥 橘
14	独詠	秋			ひぐらし
15	独詠	秋			螢
16	独詠	秋		七夕	
17	唱和	秋		紫上一周忌	
18					
19	独詠	秋		重陽	菊
20	独詠	冬			
21	独詠	冬		豊明	
22	独詠	冬		文反古焼き	
23	独詠	冬			
24	贈答	冬		御仏名	雪 梅
25					
26	独詠	冬			葦暮

⑫ 以下『源氏物語』の本文は『日本古典文学大系』による。( )内は巻・頁を示す。

⑬ 玉上琢彌氏編『紫明抄 河海抄』による。引用は522頁。以下『河海抄』の引用はこの本文による。

⑭ 以下、勅撰和歌集の引用は『国歌大観』による。

⑮ 『日本古典文学大系』。

⑯ 『源氏物語古註釈大成』。

⑰ 『紫明抄』や『河海抄』ではこの歌を引歌としており、『源氏積』に

は「神無月いつもしくれはふりしかとかくそてひたすをりはなかりき」を引いている。

⑮ 『源氏物語古註釈大成』。

⑯ 「光源氏物語の長恨歌引用の表現」『南波浩先生編 王朝物語とその周辺』。

⑰ 神野藤昭夫氏「晩年の光源氏像をめぐって」『今井卓爾博士古稀記念物語・日記文学とその周辺』。

⑱ 後藤祥子氏「哀傷の四季」『講座源氏物語の世界』第七集。

⑳ 野村精一氏「光源氏とその『自然』」阿部秋生氏編『源氏物語の研究』所収。

㉑ ㉒の論文の中に同様のことが述べられている。

㉓ 『河海抄』による。「忙つゝも」の歌は522頁、「物思ふと」の歌は531頁。